

金玉にたっぷりと魔力が突って、えちえち魔法使いたちにいっぱい搾り取られちゃう話(体験版)

「ほらジオ！ 早くしなさい！ おいてくわよ！」
「まっ、待ってよリオハっ——うわあっ！」

びゅんっ！ っと、勢い良く横切った美少女の風に、吹き飛ばされそうになる美少年。

彼の名前はジオ・エルグレイ。王立の魔法学園に通う落第生である。
銀髪低身長。一見すると女の子と間違ふほどの、ナヨナヨとした頼りない雄だ。

そんな彼の遥か先を箒で行くのは、幼馴染のリオハ・アヤレイ。
深紅の長い髪と、大きく前に迫り出した爆乳が特徴的な美少女である。

二人は毎朝一緒に登校しているが、魔力の高いリオハにいつもおいてかれてしまうジオなのだった……。

なんとかして学園にたどり着いたころには、もうヘトヘト。リオハが、箒を立てて、腕組みをして待っていた。

「遅い！ 何分待たせるつもりよ！」
「ううっ。だって、リオハがとばすからっ——あっ」

リオハは、ジオの乗っている箒を、コツンツと蹴った。
ジオが体制を崩し、こけてしまう。

さすがのリオハも、ジオをこけさせようとしたわけじゃない。ちょっと小突いてやったくらいのもりだったのに、簡単に崩れてしまったせいで、周りの生徒からクスクスと笑われていた。

「ジオってば、いっつも言い訳ばかりっ。
もう……情けないんだからっ。ほら、早く立ちなさいっ」

ぐいっ。っとリオハに引っ張られて、ジオは何とか立ち上がった。
お尻についた砂を払っている間に、リオハは歩いて行ってしまふ。

「そんなんじゃ、あたしの隣に立てる日なんて、到底来ないわね！
あ～あっ。せっかくこんな美少女が、毎日相手してあげてるのに。
あんたがまともな魔法使いになるころには、あたしはおばあちゃんになって
るわ。

東の魔女だなんて言われて、バカにされてるでしょうね！　べーっ！」

子供っぽく、あっかんべーをして、リオハは去って行った……。

朝から惨めな気持ちになったジオは、ぐすんっ……と涙ぐんでいる。

そこへ——追い打ちをかけるように、数人の魔法使いが近づいてきた。

「あれあれえ～っ？　落第生くうん。またお姫様に叱られちゃったんだあ♡」
「そっ、ソラミさんっ……。おはよう……」

リーダー格の美少女——ソラミ・ユーロイは、金髪ショートの、八重歯が特徴的な、いかにもイジワルそうな顔つきをしている、爆乳女だ。

いつも複数人で、落第生のジオのところに集まって、いやがらせをしてくるのである……。

「落第生くんさあ♡　もうお姫様と学校来るのやめたら？♡

明らかに釣り合っていないじゃん♡　それなのに、いつまでもレイ一族の関係性にしがみついて、くっつき虫してるのは恥ずかしいっての♡」

ソラミが言うと、周りの女子たちもケラケラと笑った。

ジオとリオハは、同じレイ一族の魔法使いである。

一方で、ソラミはロイ一族。魔法使いの名家ともされている両家は、日々いがみ合っているライバル関係にあった。

ソラミはリオハよりも成績が悪いために、八つ当たりのように、ジオをイジメているのである……。

「ねえねえ落第生くうん♡　そんなに魔法がヘタクソなら、ソラミが教えてあげよっかあ？♡」

「いっ、いやっ。そんなっ、ソラミさんを困らせるわけには……あっ♡

ちょっ、ちょっどっ？♡　どうして抱き着くの……！♡♡♡」

「えへへっ♡　ソラミの体あ、柔らかいでしょお？♡

今なら——優しく教えてあげるよ？♡　手取り足取り……懇切丁寧に♡
魔法以外のことも——ねっ？♡」

——むにゆう……♡ ふにゆうっ……♡♡♡

柔らかいおっぱいが当たって、潰れている♡
甘ったるい匂いのする、魔力がたっぷりと豊富に蓄えられた爆乳♡
制服の外からでも、体臭が染み出している♡
優秀な魔法使いである証だ……♡

「ええっ♡ そんなあっ♡ ダメだよっ♡ 学校で、こんなっ——」
「あははっ♡ なんちゃって～～っ♡」

ソラミは、ジオを突き飛ばした。

地面に叩き付けられた体を、魔法で無理やりに起こされる。

「あはっ♡ ジオく～ん♡ 現実見なよ♡
落第生の君があ。ソラミと仲良くできるわけないじゃん♡
まっ、いつかレイ一族の遺伝子が覚醒して、かっちょいい魔法使いになった
ら、考えてあげないこともないけどね～♡」
「うっ……♡ あっ——」

魔力が解かれて、再びジオの体は、地面に叩き付けられた。

「あはは～♡」と、愉快そうに笑って、ソラミは去って行く……。

この様子を見ていても、生徒たちは誰も、ジオを助けようとしなかった。
魔法使いとして、喧嘩を売られて買わないのは、とても恥ずかしいことである。

魔法使いは皆プライドが高く、自分の問題は自分で解決するように……と、
厳しい教育を受けていた。

(だからって……。見て見ぬふりは、酷いよなあ……)

そんなジオを見付けて、慌てて駆け寄ってくる美人がいた。

「ジオっ……。ああ……。またこんなに疲労して……」
「マリアナ先生……うっ……」
「動かないで。すぐに治療を施します……」

マリアナと呼ばれた美女先生——マリアナ・アルゼ——は、修道服を身に着けた、回復魔法の使い手である。

シスターらしく、慈悲深い面持ちの、爆乳高身長美女として、学園内でも高い人気を誇っている教師だ……。

そんなマリアナに、いつもジオは助けられている。とはいえ、彼女も魔法使いだ。ただ施しを与えるだけではなく、きちんと説教もする。

魔力を分け与え、回復させたところで、ぷくう……っとはっぺたを膨らませて「いいですか？」と切り出した。

「ジオだって、きちんと試験を受けて合格した、権利のある魔法使いなのですから。いつまでも、やられっぱなしの言われっぱなしではいけませんよっ」

「ううっ……。ごめんなさいっ……」

「魔法というのは、その素質を持って生まれてきた以上は、努力すれば必ず成果が出るものです。

それが出していない——ということは……。わかりますね？ ジオ……」

マリアナは決して厳しい教師ではない。そんな彼女が叱るくらいなのだから、ジオは相当な『サボリ』として認識されているのだろう。

彼女にはわからないのだ。努力しても魔法がまるで上達しない、自分のことなんて——。

学園で聖母とさえ呼ばれている優しい美女ですら、自分のことを理解してくれないのか……。と、ジオは途方に暮れていた。

疲れた声でマリアナにお礼を言い、逃げるようにその場を立ち去った——。

◇

そんな彼が、唯一心を落ち着かせられる場所がある。

それは……。学園の図書室。ありとあらゆる魔学の本が揃っており、それ以外の学問のものも、幅広く集められていた。

「おはようございます。ジオ……。今日も早いですね」

「オシア先輩……。おはようございます」

オシア・カナヒメ。黒髪ロングで前髪パッツンの、メガネをかけた真面目そうな美少女だ。

主にこの図書室の管理を任されており、学生ながら教師陣を超えるほどの知識を有している。

そんなオシアは、毎日のように図書室に通うジオを、とてもかわいがっていた。

「全く。皆ジオのように、ここへ来るべきです。

魔法使いは、魔力の需要があるばかりに、知識を得ようとしません。

何も魔法だけが、日々を生き抜くために必要なことではないのに……」

「あははっ……。みんな忙しくて、座学どころじゃないのかもしれませんがね……」

「ジオは優しいですね。私にはそんな配慮はできません。

……何もわかってないような奴らが、君みたいな優秀な学生を蔑ろにしている事実を、本人以上に許せなく思ってしまう」

表情が歪んでいるオシアに、ジオは……持っていたクッキーをプレゼントした。

「これ、良かったら……。ここの本を読んで、勉強して作って見たんです」

「これは……。まさか、クッキー、ですか？

ジオがこれを……。信じられません。料理のできる魔法使いなんて、初めての存在かもしれませんよ」

「あははっ……。それはさすがに、大袈裟かもしれませんけど……。

いつもオシア先輩にお世話になってるのに、何も恩返しできないままなのは、心苦しくて……。

せめてもの罪滅ぼしで、作ってみました。オシア先輩、甘いモノが好きですよ？ うんと甘くしてあるので、糖分が欲しくなったときに、是非食べてみてください……」

オシアは、じーん……。と、感動したように、目を潤ませている。

目元をゴシゴシと拭って、ジオに笑みを向けた。

「ありがとうございます。君のような、心優しい少年には、いずれ必ず精霊の加護が与えられるでしょう。

どうか、日々の辛いことにめげず、そのまま精進してください……」

ジオは、オシアと別れてから「よしっ」と小さく拳を握った。

そうしてから、適当な本を取って椅子に座り、早速勉強を始める。

(オシア先輩に認められるような、立派な魔法使いになるんだ……！)

魔力が上手く扱えないジオだが、魔学の知識は誰にも勝るほどだった。

スラスラとペンを動かしていく。しかし、いつもは感じない、酷い眠気が彼を襲った。

(今日は一段と、リオハがとばしてたからなあ……)

(うっ……。だめだ……。意識が遠のく……)

ジオは、開いた本を枕にして、スヤスヤと眠りに落ちてしまった――。

◇

ジオが目を覚ますと、そこは泉の前だった。

これは夢か……？ と、疑う前に、泉から、背の高い女性の形をした水が浮かび上がった。

「よくぞ我が意思に伝えてくれた。

ジオ・エルグレイよ。そなたに謝らねばならぬことがある」

「謝ること……？」

えっと、そもそもあなたは、誰なんですか……？」

「私はそうだな……。そなたたちの世界の言葉で言うならば、精霊とでも名乗るべきだろうか……」

「っ……！？ 精霊様っ！？

これはご無礼を……！」

「よいよい。頭を下げるな。

ここは我とそなたしかおらぬ泉。誰にもかしこまる必要などない。

それよりも、謝らせてくれ……。

そなたが魔法を上手く使えないのは、我ら精霊のミスなのだ」

「……ミス？」

ジオが首を傾げた。

水のシルエットが「ふむ」と頷く。

「本来そなたは、歴史に名を遺すレベルの魔法使いになる予定だった。

しかし、最後……。精霊の力を授けるタイミングで、我らが少しミスをしてしまったのだな。

いやなに。そなたの顔を、我ら好みに作りすぎたのだ。

見るからにおねシ〇タ向きの顔付きをしておるだろう。お主」

「えっ、おっ、おねっ……」

「そう。おねシ〇タだ。

あまりに好みの顔に作りすぎたものだから、それで満足して、大事な魔力の紐を繋ぎ忘れておった。

残念なことに、全ての力を戻すことはできん。

しかし、精霊たちが力を合わせた結果、ある特殊な方法で、お主の魔力を高める方法を発見した」

精霊が、ジオに指をさしている。

ジオは、自分の顔をさした。しかし、水のシルエットが首を横に振る。

「もっと下だ……。いや、もっと、そのさらに……。」

——そこだ。ジオ。

そなたの金玉に——たつぷりと魔力を蓄えさせてもらったぞ」

「はっ——えっ、きっ、金玉っ、ですか……？」

「そうだ。」

現実の世界に戻ったそなたは、どつぷりずっしりたぶたぶになった玉に、しばらくの間慣れることができず、苦勞するだろう。

身勝手に放出される雄の魔力フェロモンで、雌を無意識のうちに誘惑してしまうやもしれん。

しかし、そなたならきっと大丈夫。いずれその膨大な魔力を乗り越え、大エロおねシ〇タ誘発魔法使いになることができるはずだ——」

「ちょっと！？ 僕っ、おねシ〇タ魔法使いになんてなりたくなっ——」

そこで、フッ……。と、意識が途絶えてしまった。

「ジオ……？ ジョっ……」

「はっ——」

ガバッと起き上がったジオは、きょろきょろとあたりを見回している。

そこは図書室だった。どうやらうたたねしてしまったらしい……。

「珍しいですね。ジオが居眠りだなんて……」

「すっ、すいませんっ。せつかく場所を貸してもらってるのに……！」

「あぁっ……。本に涎がっ……！」

「まぁ……。ほんとですね……」

「ごめんなさいっ。弁償っ……は、絶対するんですけどっ。あいにく今お金がなくなっ……。」

僕にできる償いなら、何でもしますからっ。許してください……！」

「……償い、ですか」

オシアは、その言葉を聞いて、急にモジモジし始めた。

頬がいつもより赤い……。様子がおかしいオシアに、ジオは疑問を抱く。

「オシア先輩、熱があるんじゃない……」

「そうですね……。ふう……♡ 何だか、体が火照って……。」

ジオ、あの……♡ 償い、ですけど……♡」

オシアは、ジオの肩に手を置いて……身を屈ませて、耳元で囁いてきた……。

「ジオの……その……。
……おちんぽを、見せてください——」

◇

場所は変わって、学生寮。

オシアは寮で生活する生徒だ。優秀な学生なので、個室が与えられている。

「この時間であれば、誰かが訪ねてくることもありません。
ジオ……。そこに座ってください……♡」

ジオをふかふかのソファーに座らせたオシアは、隣に座るのではなく、彼の前にひざまずいた。

じ～……♡っと、股間のあたりを見つめている。移動しているときに気付いたが、なんとなく金玉が重たい。

ペニスも、なんだか収まりが悪いような……。

「あのっ、どうして突然、おち、おちんぽなんて……♡」

「わ、私だって。クソ真面目に思われるかもしれませんが、周りの女子と、性的関心については、あまり変わりません……。いやむしろ——ちょっと強い方かもしれませんね……」

胸のあたりで、ぎゅっ。と拳を握るオシア。

その拳が、豊かな胸を揺らしている。真面目に着こなした制服に、ミチミチになるまで詰め込まれたおっぱいが、窮屈そうにしている……♡

「いいですか？ ジオ……。しかしこれは、あくまでも償い、ですから……♡
むやみやたらに、喘いだりしちゃダメですよ？♡ 約束です……♡」

オシアは、緊張した様子で、ジオのズボンを脱がせていく。

ぷるぷると震える手。荒い呼吸♡ 誕生日のプレゼントを開ける子供のように、ワクワクした様子で、ジオの股間に注目している♡

ズボンが脱げて、パンツが露わになった途端——オシアの目が、カッ♡っと見開かれた♡

勃起する前の陰茎が、パンツの隙間からはみ出していたのだ……♡♡♡

(あっ、あれっ……？♡)

(僕のちんこって——こんなに大きかったっけ……？♡♡)

一般的な成人男性の、勃起したのと同じくらいのサイズの、デカくて太くて長いペニスが、だら～ん♡とぶら下がっている♡

同じ隙間から、ぷりぷりに実った生牡蠣のような、豊かな金玉袋も、はみでてしまっている……♡♡♡♡

「ジオ……♡ 可愛い顔して、とんでもない兵器を隠し持っていましたね♡

すすう……♡ ……おっほ♡ 匂いやっぱ……♡♡♡ 相当濃い魔力の匂いがします♡

やっぱりジオ♡ 君は能力を隠していたんですね？♡

昔っから、妙に魅力的な香りがすると思っていました♡ それはまさに、イケメン魔法使いが持つ、雌魔女を引き寄せる淫売の体臭……♡♡ すすん♡

それが詰まった極上の香りがしますよ♡ んほ♡ この金玉袋からは♡

はひいっ♡ おほっ♡ すんっ♡♡♡ すほおっ♡ おっ♡ お～……♡♡♡」

頭がクラクラする♡ 魅惑の雄の香りに、すっかり魅了されながら、震えた手つきで、ジオのパンツを脱がせるオシア♡

メロメロの状態の彼女の瞳には——ハートマークが浮かんでいた♡

(こっ、これはまるで、インキュバスの魅了魔法の症例だ……♡)

(オシア先輩……いやっ、僕がおかしいのか……！？)

夢の内容をすっかり忘れていたジオは、戸惑いつつも、丸出しになった性器のことを考えなければいけない♡

オシアが、目をキラキラと輝かせて、ちんぽと金玉に交互に目配せをしている♡ どちらも魅力的で、どんな風にして見れば良いのか、わからなくなってしまったのだろう♡

「ん？♡ ンほっ？♡ あれっ？♡

ちんぽ見るんでしたっけ♡ 私♡ んほお♡ でもダメです♡ 頭が金玉に引っ張られています♡

遺伝子が溜まっているのはこっち♡ こっちを愛撫すればミルクが♡ こっぴりの魔力がぎゅうぎゅう詰めになった、栄養たっぷりのフェロモンおしっこが♡

たくさん摂取できそうですね……♡♡ ふん♡ ふん……♡♡♡」

金玉をたぶたぶ♡と手のひらに乗せて揺らしながら、その豊満な玉袋に期待を寄せるオシア♡

彼女の子宮は、きゅきゅ～……♡と切ない音を立てて鳴いている♡ お腹が空いているのだろう♡

「はあっ♡はあっ♡ ジオ……♡ 金玉嗅ぎます♡ 直嗅ぎです♡
んほお……♡ すんすん……おっ♡ キマるう♡♡ これやばあ♡♡
くっさあ♡ けほけほ♡ あ～くさっ♡ くっせ～……♡ おほ～っ♡♡♡」

真面目なオシアから、こんなセリフが出るなんて……♡♡♡

ジオはドキドキしている♡ 玉袋に触れるオシアの指がくすぐったくて、腰が浮いてしまう♡

ドデカいちんぽに、段々と血流が激しく巡り始めて……♡♡♡
どくんっ♡どくんっ♡ びきっ♡ びきいっ♡♡♡
風船を膨らませるように、ちんぽがどんどん分厚くなっていく♡

そしてとうとう——立派に勃起して、オシアの方にその突先を向けてしまった♡♡♡

「はっ——♡♡ なっ、なんですか？♡ ちんこ♡ 私に喧嘩売ってるんですか？♡

いいでしょう♡ その勝負乗ったあ♡ おほっ♡ すんすん♡ お——くせ♡♡
くっせ——♡ けほけほ♡♡ ああ`ん臭いっ♡ 特にこの先っちょから漏れてる玉のつゆが臭い♡♡ くせ～～♡♡ おいひっこめろ♡ なんつーもん雌に嗅がせてんだ雄のくせにっ♡ 落第生のくせに！♡ あっ！ ごっ、ごめんなさいジオ私、私どうかしてます……ふ——`♡♡ でもジオのせい♡♡♡ ジオのせいですからねっ`♡♡ おほっ♡ ふっ`♡♡ ふっ`♡ ふほ♡ おほっ`♡」

くちゅくちゅ♡と、イヤらしい音が聞こえてきた♡

オシアが、たまらず、自分のまんこをいじくり回しているのだ♡
パンツの上から、ごしごしごし♡ お股をキュッ♡と閉じて、ぷっくらと膨らんだ割れ目をぬちぬち♡と擦っている♡♡♡

「お`っ♡ お`っ♡ おほ——っ♡ すんすん♡ お`——……♡ キマるう♡
おっほ♡♡♡ ジオのちんぽ嗅ぎながらのオナニー♡ めちゃくちゃ拗りますね♡ おっほ♡ す——……♡♡ おお～ん`……頭が溶けるう`……♡♡♡
脳みそアホアホになっちゃいますよ？♡ おっ♡ ふ——んっ♡♡♡
「あっ♡ ああっ♡ オシア先輩……♡♡ ぐふっ♡ とっ、吐息が♡

吐息が当たって、くすぐったいですう……♡♡♡ ひやあつ……♡♡♡」

次から次へと溢れてくる我慢汁に、興味津々のオシア♡
金玉袋を手のひらに乗せて、たゆんたゆん♡つと揺らしている♡
そうすることで、さらなる玉脂の抽出が可能であると、雌の本能で気づいてしまっているのだ♡♡♡♡

そしてとうとう——♡♡♡ ペニスの前で、舌をレロレロ♡と素振りし始めてしまう♡♡♡

「へあつ♡ へうっ♡ ちんぽおっ♡ おっほ♡ 見るだけでは足りません♡
おほっ♡ しゃぶります♡ お♡ ちんぽしゃぶる♡ お♡ お——♡♡♡」

——ぱくっ♡♡♡

——ちゅ——っ……♡♡♡♡

「んほっ♡ んほっ♡ ああ` ~んもおちゅっちゅ♡ ペろペろペろペろ♡♡♡
ぷはあつ♡ ふっ♡ふっ♡ なんですかこれ♡ あまあ♡♡♡ げほっっ♡
おえっ♡ うんざりするほど甘ったるい味がするう……♡♡ お` ~♡♡♡」
「あ、甘いっ？♡ そんなわけっ——ひやうっ♡♡♡」
「ふんっ♡ふんっ♡ うるひゃい♡ くちごはえしないれくらひゃい♡
ぷはあつ♡ ふ——っ♡♡♡ ちんぽ冷ましますよ？♡ おっ♡ ほ——っ♡
ふ——♡♡♡ ふ——♡♡♡」

瞳を揺らしてムラムラしながら、オシアは股をくちゅくちゅ♡と弄っている♡

辛抱たまらなくなってきたのか、ジオのちんぽにむしゃぶりつきながら、腰をカクカク♡と動かし始めた♡♡♡

「あっ♡ あっ♡ きもちいっ♡ きもちいですオシア先輩っ♡ ああ`♡
ダメえっ♡ そんなに吸ったらあつ`……おっほっ♡♡♡ 出ちやう♡♡♡
出ちやいますよっ♡ オシア先輩あつ♡ ダメダメっ♡ あっ♡♡♡♡
あっ——♡♡♡ イク——♡♡♡ ン——♡♡♡」

——どぴゅっ♡♡♡ びゅるぶっ♡♡♡ ぼびゅぼびゅびゅる——っ♡♡♡♡

勢い良く吐き出された白濁液が、びちちちい♡つと、オシアの喉まんこを貫いた♡♡♡

「ぐふうっ`！？♡」つと咽せたオシアは、それでも必死にちんぽにしゃぶりつく♡♡♡ ペたペた♡と舌を這わせ、じゅろろろ……♡ ごくごくごく♡♡♡

ストローから直接種を吸うみたいにして、ちんぽちゅぱちゅぱ♡
「おっひ〜♡♡♡」と、たまらず喘ぎ声が出てしまうジオ♡ ちんぽをちゅるちゅると吸い立ててくる柔らかい唇が、エロくてたまらない♡♡

「おっ♡ あっ♡ イクイク♡ まだ出ます♡ オシア先輩♡♡♡
あっ♡♡♡ オシア先輩……♡♡♡ んほお……♡♡♡♡♡ イクう……♡♡♡」

——どびゅ♡ びゅるっ♡♡ びゅぷっ♡♡ びゅ——……♡♡♡

腰をカクカク♡とへこつかせて、オシアの喉まんこの奥に、ひたすらに種をばら撒く♡

オシアも感じており、股から染み出した愛液が、パンティにこし取られて、ポタポタ♡と、ろ過された状態で床に垂れている……♡♡♡♡

「ハアッ♡ ハアッ♡ んぼっ……♡♡♡♡♡ じゅるるる……ぷへあ♡♡♡
ふー♡♡♡ ふー——♡♡♡ ありえない量です……♡ げほっ♡ おえっ♡
胃袋が、孕まされてしまうかと思いました……ぐひいっ……♡♡♡」
「ハッ♡ ハッ♡ オシア先輩っ、ごめんなさいっ♡
何か拭くものを——あっ」

ジオは、靴の中から、ハンカチを取り出そうとした。

しかしその前に——自分の手のひらに、布切れが握られていることに気が付く。

さっきまではなかったものだ。突然の出来事に戸惑っていると、金玉をたぼたぼ♡と揺らして、うっとりした顔をしながら、オシアが説明した——♡

「物質精製の魔法です……ジオ……♡
君の魔力は——たった今覚醒しました♡ 間違いありません♡
ちゅっちゅ♡ あん♡ まだ先っちょから濃いのが……じゅろろろろ♡♡♡」
「ひゃあっ♡ 吸わないでえっ♡♡ おっ……♡♡ くすぐったいですよお♡♡」
「じゅろろろろ——つぶはあ♡♡♡ ふー——♡♡♡ 無理です♡♡
できっこないですよ♡ ジオ……♡ 君はもう、立派な魔法使いになりましたから♡

この魔力の質♡ 精液の粘度♡ どれを取ってもピカイチです♡
噂に聞くイケメン魔導士の、爆裂金玉袋の匂いやフェロモン、遺伝子の濁り汁の質量♡

全て上回っています——君は今、この大陸で一番の、金玉魔力保持者かもしれない……ちゅぱ♡♡♡ ちゅう♡♡♡ ちよっと♡ ふぐりもいただいでいいですか？♡

ぺろぺろ♡ あ〜ん許可出る前に舐めちゃう♡ はーんくっさ♡♡♡
汗ばみ玉裏汁くさあ♡ ぺろぺろ♡♡♡ ちゅ——っ♡♡♡♡♡」

「んほおおおっ` ……♡♡ らめえええっ` ……♡♡♡」

舌がねちっこく、金玉をプルプルと震わせてくる♡
自分でもなかなか触らないようなところをくすぐられると、ただ悶えることしかできない♡♡

しかも、ぷりっぷりに膨らんだ金玉袋♡ 神経も発達していて、感度も倍増している♡♡♡

オシアの献身的な、雌舌ペロペロ愛撫だけでも、種が漏れてしまいそうだ♡
ジオは慌てて、オシアの肩を叩き、玉の愛撫を中断させた……♡♡

「はあっ♡ はあっ♡ これはマズいです……♡ ジオ……♡

君は長い時間、金玉で精液をくすぶらせてきたのでしょうか♡ おかげさまで、種汁の濃度が凄まじく濃ゆいです♡

また、一般の魔法使いなら扱えないような、物質精製魔法を、無意識の間に発動させてしまうあたりも、力の制御ができていないようですね♡

そうだ……♡ 魔力の暴走が治まるまで、ここに住むのはどうですか？♡

私に種を譲ってください♡ こんなに魅力的な玉脂を飲むのは初めてです♡

一目惚れしました♡ 私と結婚しましょう♡ ジオ♡ あれ？♡ なんですかその顔♡ 戸惑ってるんですか？♡ ふひひ♡ 心配いりません♡ 私は将来きっと安定した職業について、君を——」

そこで、じりりっ♡とアラームが鳴った♡

どうやら授業の時間らしい♡ オシアは「ちっ♡」と舌打ちをしてから、最後に玉脂をじゅぽぽお……♡と啜った♡♡

勢い良く唇から離された金玉が、ぺちんっ♡と付け根に当たって跳ねる♡

クセになるような玉の快樂を、僅か数分で植え付けられてしまった……♡♡